

総合的な学習における地域獣医師会の取り組み

-動物福祉と触れ合いのバランスを考える-

○柿沼美紀A, 畑 孝B, 米川秀彦B, 野瀬 出A

日本獣医生命科学大学A, 杉並区獣医師会B

諸言

文科省は平成29年告示の小学校学習指導要領解説-生活編-の中で継続的な動物飼育や動物との触れ合いの重要性を指摘している。また、地域の獣医師などと連携し、飼育を行う重要性を明記している。

ヒトに触れられることを目的に家畜化されていない動物の場合、大人数の児童による触れ合いは動物福祉的には適切でない場合もある。

本研究では、杉並区獣医師会の授業支援活動を通して、総合的な学習や生活科、道徳における現状と課題について検討する。

結果

(1) 授業支援実績

杉並区獣医師会は平均年6回、812名を対象に動物教室を実施

(2) 授業支援内容とその変遷

平成20年「動物ふれあい教室」、平成29年に「動物教室」に変更平成30年よりイヌを用いたプログラムを導入(図1)

学校で飼育してるウサギ、チャボ、ハムスター、モルモットが中心。飼育頭数が少ない場合は、レンタル動物動物を使用。

スピーカーのついた心音計の利用

紙芝居の利用

(3) 教科書で扱われる動物

ウサギやモルモットとのふれあいを重視(図2)。ウサギを

ぎゅっと抱く経験が良いものとして記述されている(図3)

獣医師などの専門家の活用の記述がある(図4)。

方法

(1) 事業件数と対象人数

杉並区獣医師会の平成25年-30年の教育委員会から要請された授業支援データを集計

(2) 授業支援内容とその変遷

杉並区獣医師会動物教室資料の分析

ボランティア活動に参加の獣医師のコメント

(3) 生活科、道徳の教科書における動物に関する内容の検討



図1 (左上) 大日本図書 せいかつ 上

図2 (上) 東京書籍 どうとく 1年

図3 (左) 学校図書 せいかつ 上

考察

教科書に準じた触れ合い活動では、大勢の児童がウサギなどに触れるなど、対象動物の福祉への配慮を欠くことになりかねない。

動物に配慮してウサギの心音を聴く、ウサギを抱くためには、触れ合い用動物をレンタルすることになる。しかし、触れ合い目的のレンタルが動物福祉に反するという考え方もあ。

杉並区獣医師会は授業支援の名称を「ふれあい動物教室」から「動物教室」に変更し、ウサギの心音はスピーカーを使って聴かせる、イヌを用いた内容に変更する、スライドを用いるなど、動物福祉に配慮した支援を実践している。

小学校での動物飼育を「他者を思いやる」情操教育と位置付けるならば、飼育動物の福祉に配慮した取扱いが必要である。

触れて人との違いを学ぶことが目的なのであれば、ある程度の負荷は容認することになるだろう。

今後は、この点について学校と獣医師がさらなる意見交換をして飼育動物の活用を行うことが求められる。

図4 イヌの授業の資料

町で 犬に 出会ったら

「可愛い」「びっくり」は
人と 一しょ

- 大きな音
- かこまれる
- 上からのぞく
- とつぜん 近づく
- とつぜん さわる

